

## 古典をどう読むか (05・04・18)

秋山 虔 (昭18文丙)

### はじめに

村尾さんから三高十八日会で何か話をするようにという電話を受けたのは一月でした。その折りに村尾さんが「本を出しましたね」とおっしゃったので、その本をお送りしました。その書名が『古典をどう読むか』なので、村尾さんのお考えは、この本をめぐって何かお話をするようにとのことだったようです。

古典と申しましても具体的には源氏物語を中心に、これまでどんな研究書が書かれてきたか、私の出会った名著の紹介なのです。私は昭和22年に東京帝大文学部の国文学科を卒業して、日本の古典文学とおつきあいするようになったのですが、その「国文学」という学問がこのところたいへん不景気です。大学で国文学科なるものがしだいに消滅しつつあ

ります。

抑も、文学研究などという、いわゆる虚学は効率万能の工業文化旺盛の当世では軽んじられるのも当然でしょう。グローバリゼーションの加速化も日本の心性の表現への無関心を促進しているといえないでしょうか。大学の国文科で勉強し、論文を書き、著書も上梓したような気鋭の研究者が、その研究を続けてゆけるような職場になかなか恵まれなくなっています。日本の古典遺産の価値を闡明して、次の時代に伝えていく責任のある研究者が冷遇されるということは憂慮すべきことだと思えますが、それはそれとして、そうした国文学に関する問題に皆様がどれだけ関心をお寄せになるか心配でございますが、こういう題目をお決めになられたのですから、この本のなりたち、また刊行の意義や内容の若干について時間の許す限りでお話ししたいと思います。

この本に収められている文章は『日本の美学』という雑誌に連載されたものです。その雑誌は今道友信という哲学者を主幹として、河竹登志夫、高階秀爾、多田道太郎、それに私とが編集同人になっていた学際的な論叢誌でした。そうした専門的な学術誌ではない雑誌にふさわしいのではないかと思ひまして、いわゆる国文学者ではない人によって書かれた、そして国文学者にとつても読むに値する最近の論説を紹介する記事を連載することにしたのです。

## 大岡信著『あなたに語る日本文学史』と竹西寛子著『日本の文学論』

その第一回として大岡信著『あなたに語る日本文学史』（古代・中世篇・近世・近代篇、平成7新書館）と竹西寛子著『日本の文学論』（平成7講談社）を組上りにのせました。なぜこの二著をとりあげたのかですが、大岡氏によって書かれた日本文学史は、私などの書くそれとはあまりにも違うのです。ここで詳しく内容に立入ることになりますと本日の報告から脱線する虞れがありますが、一例をあげれば、本書の上冊のほうについて申しますと、「政治の敗者はアンソロジーに生きる——『万葉集』」という第一章に次いで、第二章以下は

- II 平安文化の表と裏——『古今和歌集』
- III 詩歌の歴史は編纂者の歴史——『古今和歌六帖』
- IV 奇想の天才源順——『伊勢物語』と『大和物語』
- V 女たちの中世——建礼門院右京大夫と後深草院二条  
(以下略)

ということになりますが、ここには『源氏物語』『枕草子』『今昔物語集』『平家物語』『徒然草』等々の顕著な大作の名が見当たらないのです。著者自身、ずいぶん風変わり

な文学史と思われようと述べていますが、いたるところで横道にそれ、横道のほうにどうやら面白い生き物が棲んでいるかもしれないなどと呟きながら、どんどん別の道を歩いていつてしまう文学史であろうとも述べています。まさに型破りで、これは文学史というよりは古典文学散歩とでもいうべきか、大岡氏の古典文学との出会いの軌跡を知ることができるとともに、いったい文学とは何かをあらためて考えさせます。型にはまった解題列伝的な文学史の面白くなさを反省するよすがとして、この著書を俎上にのせた幸いです。

もう一冊の竹西氏の著書はこれまたたいへん触発的な文学論でした。日本の前近代の文学論の述語や論のすすめ方の曖昧さ扱い難さは否定すべくもないけれども、しかし曖昧という断定に逃れず、言わんとするところをつとめて推し量り、普遍化してみよう、という姿勢で、歌合の判詞や歌論、能楽論を読み解いていく著者は、一方で最も良質の美しく明晰な文章を紡ぐ作者であり評論家であるだけに、この『日本の文学論』は私にとって注目すべき著書だったものですから、大岡氏の著書とともに紹介することにしたのです。それが掲載されたのは前記の『日本の美学』第25号（平成九年四月刊）でした。

「出会いの名著」という見出しで、多くの人々に繙読をすすめたい新刊書を次号からも紹介していくつもりだったのですが、しかし二回目から大きく方針を変えることになり、新刊書ではなく、私のこれまでの歩みの途上で出会った古典的名著を取り上げることにし

たのです。その方が読者にとって有益ではなからうか、最近の若い世代の研究者の論文を読むと、論題・内容が瑣末化し、目さきの言論に気を取られて、すぐれた先学の遺業に目のとどかない傾きがある。先学がどのような関心から何を明らかにし、何を明らかにし得なかつたかを知ることが、これからの研究者にとって大切であらう。これは私の友人であり、私と同じく王朝文学に従事している鈴木日出男氏の助言でした。それに従うことにしたのです。

最近のことに若手研究者の傾向として、いかにもそれが新しい研究でもあるかのよう  
に、海外の輸入理論を適用する例が顕著であるといえましょう。神話批評、王権論、記号  
学的テキスト論、脱構築、ジェンダー批評、メディア論、ナラトロジー等々、従来の伝統  
的な研究の枠組みを内破するさまざまな方法的なアプローチが多面的になされてきました。  
確かに、これまでは見えていなかった地平が開けてきまして、私などずいぶん啓発される  
ところが多かったことは否定しえません。しかし、そうした理論や方法はそれが創出され  
た歴史、社会の文化であり、そのことへの精察を抜きにして移入するのだったら、それら  
によって研究の最前線が確保されることになること一応は言えるにしても、結局は移ろい動  
くさまざまな意匠に過ぎない、と言えなくもない気がします。それらは対象である古典の  
上を通過して結局は古びていくことになるのではなからうか、という気がいたしました。

むしろ、すぐれた先学たちが私たちに遺してくれた偉業こそが、現在もなお、古びることなく訴えかけてくるのではないか。鈴木氏の助言は私としては全く同意見だったものですから、第二回以後、私にとって忘れがたい、そして何ほどか私の歩みに作用した著者を取り上げることにしました。

### 『国文学全史平安朝篇』

まず最初に俎上にのせたのが、藤岡作太郎著『国文学全史平安朝篇』です。藤岡作太郎は金沢生まれで第四高等中学校（後の四高）から東京帝大の国文学科に入って、卒業後、大阪府立一中（後の北野中学、現在の北野高校）や京都真宗大谷派第一中学校を経て第三高等学校に就任したのが明治三十年（二十八歳）、そして三十三年に東京帝国大学助教に就任したのですが、十年後、明治四十三年に死去しました。多数の著書がありますが、『国文学全史平安朝篇』はそのなかでも抜きん出た名著だといえましょう。

藤岡は四高出身でしたが、三高からも傑出した国文学者がたくさん出ております。そのなかの一人が高木市之助で、明治四十二年に三高を卒業して東大に進学したのですが、『国文学五十年』（岩波新書昭42）のなかで次のように述べています。「藤岡先生のどういふところに魅力を感じたかということになるとなかなかむづかしい。というのは、五十年

前に私の感じた魅力は今日の私からいえば大きく批判的でなくてはならないが、しかもそうした批判だけで片づけることのできない先生の魅力を私は今でも感ずるからです。つまり藤岡先生の見方が新しいとか古いとかいうのではなくて、文学というものにじかに触れていたんですね。(中略) 藤岡先生の仕事は今から見ればあまりにも素朴性を帯びているようだが、そこに何か無限の可能性みたいなものを当時としては感ぜられたのです。」

高木市之助は同級生がすべて京都帝大へ進んだのに、ひとり東京帝大に進学しました。藤岡のもとで勉強したかったからですが、しかし高木は憧れの藤岡の文学論を聴講するとはできませんでした。前記のように高木が東京帝大に入学したその翌年の早春、藤岡は短い生涯を終えたのです。

高木をして東大進学を決意させたのは藤岡著『国文学全史平安朝篇』の魅力でした。私はこの著書の改造文庫版を京都北白川の古書店で購入したのですが、たまたま目についてなんとなく手に入れた本書の内容もさりながら文章の格調に引き込まれました。少しばかり引用します。

山紫水明の語は、よく京都の景色をいい表わせり。何処の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸気の然らしむるなるを知らば、三面を山にして土地湿潤しつじゆん、水分

を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに変化に富めるかは、説明を須いずとも明らかなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日、驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりくゝて海を覆う。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か、世界はただ一暗黒の中に没し去るか、疑われて凄まじかりき。かくの如く壮絶なる景は、わが数年の滞留中、遂に京都にては見ることを得ず。されど下京より吉田に通いたる朝なくゝの景色の、今にも恍惚として眼前にあるを覚ゆ。ひき渡す霞に、三条の大橋の擬宝珠の、一つく彼方へくゝと薄くなりて、向うに寝たる東山はあるかなきかの夢よりいまだ覚めやらす。吉田の岡に並び立てる松は墨絵の刷毛の濃く薄く、花売る乙女の姿は隠れて、声ぞまず朝靄を漏れ来る。時雨の景色の、またよその国には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆いて白く光りたる薄布の、さては時雨と思いうちにはらくと面を撲つ、あわやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かかるやさしき景色は、山河襟帯の平安京の特色なり。

長々と引用しましたが、皆さんも私も京洛の地で青春の一時期を過ごしたわけですから思い出を甦らせていただけるかなと思いました。



この文章は、次の七章から成る総論のなかの第二章「平安城」のなかに書かれているのです。

一 上古と近世

二 平安城

三 平安朝の社会

四 日常の生活

五 仏教の流布

六 情念偏重の時代

七 時期の区画

この著書が上梓されたのが明治三十八年、日露戦争で日本が大勝した直後であるだけに、「われら何の幸か、この昭代に遇<sup>あ</sup>いて、千古未<sup>み</sup>曾<sup>ぞう</sup>有の大戦を見、みずから戦勝国の民と誇ることを得るや」と書き起こして、戦況を語り述べ、勝利を歓喜する文言が格調高く述べられております。その勝因を「武士道」に求める説は「穿鑿に過ぎて滑稽に陥るの感なくんばあらず」といい、「武士道」は「わが国民思想の精髓」であり「日本国民の宗教」であるとしながらも（新渡戸稲造著『武士道』へ英文版）明治33に寄添うものである）、それでもって上下三千載の歴史を説明することはできなからう、というのですね。

あれこれの議論の委細は穿鑿しませんが、要するに平安時代の文学を理解するには「評者みずから平安朝の一人となりて、以てその時代を見る、蓋し正鶴を得るに近からん」、「一々の作者、作品に就いて評論する前に、まず当時の社会の情況、風俗思想の一斑を示し置くを得策とすべし」と、そんな次第で、さきほど申した「総論」の各項が述べられていくのですが、一々紹介申しあげるわけにもまいりません。それぞれの章では実に細緻な説述を読むことができます。久松潜一がかってこの藤岡の文学史の特色を論じて、文学の研究に、人種・環境・時代の三大原動力から説明して実証的な批評の確立をめざしたフランス十九世紀のテーヌという学者の方法を適用したものだと言及していましたが、こうした藤岡の方法は当時としてはきわめて斬新であったと思います。

具体的には申し上げられませんが、たとえば源氏物語を俎上にのせた論述などまさに本書の圧巻ですね。私は折にふれて披見し、姿勢を正す、と申したい。その内容は

- (一) その梗概
- (二) 注釈批評の書
- (三) 紫式部
- (四) 古来の準拠説
- (五) その評論

ですが、(一)はけっして単なる梗概ではないのです。源氏物語の世界を、その進行に即して前紀(一・二・三期)、中紀(一・二・三期)、後紀(一・二・三期)、宇治十帖(前・後期)に区分して展開する主題を追い、構成を論じています。(五)の卓越した評論と呼応するものでして、いかにもさきほどの高木市之助の「文学というものにじかに触れていたんですね」という文言が合点されます。(二)は研究と享受の歴史を時代時代の精神の表現として批判的に追求するものであって、単なる人名書名の解説ではないし、(三)は申し分のない紫式部論です。具体的には説明できませんが。とにかく、明治三十八年といえは百年前です。この百年間にあらゆる部面で研究が進んだことはいうまでもないのですが、にもかかわらず鮮度を失わないこの『国文学全史平安朝篇』は研究書の古典と申してよいでしょう。

### 高木市之助『日本文学の環境』ほか

私は『古典をどう読むか』で、この藤岡の著書に次いで

芳賀矢一『国民性十論』(明治40)

五十嵐力『新国文学史』(明治45)

内藤湖南『日本文化史研究』(大正13)

高木市之助『日本文学の環境』(昭和13)

風巻景次郎『文学の発生』（昭和23）

島津久基『紫式部の芸術を憶ふ』（昭和24）

西郷信綱『日本古代文学史』（昭和38）

益田勝美『火山列島の思想』（昭和43）

寺田透『源氏物語一面』（昭和48）

などの諸書を取りあげました。（以上は刊年順に配列したが、発表の順は前後する）

これらの著書は原稿の締切日も迫って苦しまぎれに選んだものですが、しかしこうして眺めわたしてみると、いずれも私のこれまでの歩みに深くかかわり、強く働きかけた記念の書であるといえます。しかしいま一々触れるわけにもまいりませんので、さきほど『国文学五十年』という著書に触れた私達の先輩、三高出身の高木市之助の『日本文学の環境』についてだけ申しておきたいと思います。いったい三高出身の国文学者のなかでも、高木市之助という人は私にとつてとくに忘れがたいですね。

高木の代表的著作には『吉野の鮎』とか『古文芸の論』などといった卓越した古代文学研究の大著がありまして、それらを含む全十巻の全集が編まれています。なぜ私が『日本文学の環境』という小冊子を俎上にのせたのかといえますと、そのなかで平安文学に関してその環境「みやこ」についての考えかたの魅力ゆえでありました。高木によれば「環

境」と「自然」と、両語の意味は必ずしも重ならない。「環境」は「文学と相関関係においてのみ存在する」、あるいは「どこまでも文学をとりまくもの」であって、文学の側からすれば「見まわすもの」ということになります。次のように述べられています。

京都において東山が紫に映え、鴨水が明澄だという事実はこの地の自然の優秀性を語るには足りようが、それによってそのままこの地所産の文学の優秀性を規定していこうとするならば、それは気象学や土俗学に見られるような、ある自然科学的方法であり態度であって、文藝学あるいは広く精神科学的なそれらではない。この場合の山紫水明がすなわち「自然」と呼ぶにふさわしい存在なのである。ところが文藝学的な態度はややこれと異なるのであって、すなわちこの場合山紫水明は文学と無交渉に東山や鴨川に求められるべきではなく、文学をとりまくもの、さらに文学が見まわすものとして求められなければならない。山紫水明はそれが文学をとりまき、それを文学が見まわす限りにおいて当然文学の性格を規定する。すなわち、鴨川の水がきれいだからといってそれは必ずしも鴨川畔の文学の性格を規定するとはいえない。けれどもひとたびこの鴨川の水がじかに文学をとりまき、あるいは文学が鴨川の水を見まわすとき、はじめてこの川の水のきれいさがその文学を規定しはじめるのである。この場合の山

紫水明を前の場合のそれ、すなわち「自然」の名にふさわしいものと区別するために考えた言葉がすなわち環境なのである。こういうふうにかけていくと自然と環境とは学問の態度にかかわる名称であり、ここにそんなに簡単に「自然」と置き換えることのできない「環境」の特殊の意義があるのであろう。

このように規定される「環境」の在りようを文学史の展開のなかにどう読んでいくか、いま逐一たどることはできませんが、平安文学に関して、たとえば、土佐国から平安京までの紀行である『土佐日記』に、あるいは『伊勢物語』の東下りの諸段についていえば、そこに地方的郷土的な国物語を読むことはできず、道中の自然は疎遠をきわめた存在に過ぎないのであって、そこにある環境はどこまでも「みやこ」なのだと思います。まさにそうでしょう。

高木は、平安朝文学の季節感について、万葉文学の比ではなく、きわめて敏感に複雑化していることについて、そこに環境「みやこ」の性格をつぎのように説き及ぶのです。

彼らのもっていた環境は（中略）きわめて固定したまた限界をもつた「みやこ」であった。そこで彼らのありあまる能力はこの地域的に縮小された彼らの環境をなんらかの形において取りもどさなければならなかった。それがすなわち「みやこ」のもつ極端に鋭敏な季節

性ではなかったか。いわば平安朝人は空間的に奪われた自然を無理に時間的に回復したようなものなのである。そこに彼らのもつ季節感情が単に風土の四季の変化という特徴だけでは説明しえないほどに、ほとんど変態的に昂揚されている、少なくとも一つの理由があるのである。

この文章を何度反芻したことか。平安朝の和歌・物語・日記文学にかたどられる、あの「変態」的なまでに細緻な自然像は文学によって創造された環境のかたちだったことになります。まさに文学が無いところにも自然はあるけれど、「環境」はありえないのですね。「環境」はどこまでも文学と作用被作用の関係においてのみ措定されることになります。

なお、他の著書、ことに風巻景次郎、西郷信綱、益田勝実ほかの、私に対して決定的に作用した著書についても触れておきたのですが、本日は私どもの母校である三高、私どもはそこで三年——実際は二年半に短縮されましたが——を過ごした京都に關係のある書に限定させていただきますました。

## おわりに

最初に申しましたように、とくに最近の若手の研究者が実に旺盛に、海外の新しい文学理論を借用した論文を発表しています。また研究が学際的になり、隣接諸学の研究成果の積極的な摂取も盛んです。それにつけても、思い起こされるのは小林秀雄の次の言葉です。「研究方法は借りもので済むとしても、研究の対象の吟味には自力が要る。而も、この吟味には、想像力と直覚とが要る。」こうした文言がどういう文脈のなかで語られているかを無視して、ここで引用するのはいわゆる断章取義というものでしょうが、私が小著のなかで取りあげてきた人々の著作は、じつにその方法が借りものであるかないかということ突き抜けて、まさに「自力」で文学に立ち向かっている、という点で魅力的であり、強く私に働きかけたのだといえましょう。

(東大名誉教授)